

源氏狭衣百番歌合の研究

— 巻頭巻軸に見られる撰集意識 —

長 沼 友 奈

一 作品紹介

『源氏狭衣百番歌合』（以下『百番歌合』と表記する）は『源氏物語』と『狭衣物語』の作中歌を歌合として左右に配し、百の対として配列した撰集作品である。その左右歌二首は詠歌状況の類似や歌詞の一致等を接点として番えられており、歌合として響きあっている。

久曾神昇氏によって藤原定家自筆本が発見されたことと、自筆本『後百番歌合』（『源氏物語』と十の物語の作中歌を歌合形式に配列した作品で、『百番歌合』と構成が似通っている）の奥書に「此歌先年依後京極殿仰、給宣陽門院御本物語、所撰進也。私草被借失了。仍更求書写本、令書留之。」^{注2}とあったことから、九条良経とも宣陽門院とも交流のあった人物である、藤原定家が撰者であるとする点については諸説一致しているが、成立時期や制作

意図については、作品自体に付されていないこともあり、なお断定されていない。

二 先行研究および本論の目的

かつて『百番歌合』は、物語作中歌であるという観点から、『源氏物語』研究の資料的な扱いを受けることが多かった。^{注3}理由として二点挙げられる。一点目は、物語作中歌が物語の一場面を想起させるためである。世に広く親しまれている物語の印象的な詠であれば、和歌のみで物語の詠歌状況を想起させるが、『百番歌合』の撰歌も、各歌がそれぞれ物語の一場面を想起させる。『源氏物語』の一場面と『狭衣物語』の一場面を並べて、両者を比較しているように思われるのである。二点目は、『百番歌合』の配列が『源氏物語』を中心に撰歌されているように思われるためである。配列の連想が、比較的に『源氏物語』作中歌どうしの

流れを優先させていることや、歌合のルールとして左歌（『百首歌合』における『源氏物語』歌）が優位に立つことが挙げられる。

しかし近年、『百首歌合』に撰された和歌の読解は、『源氏物語』や『狭衣物語』の作中歌の読解とは異なるのではないかとの見解が示され始めている。各歌の詠歌状況を説明する『百首歌合』の詞書が、『源氏物語』や『狭衣物語』の物語場面の正確な解説よりも、『百首歌合』の歌合としての対や、番どししの連想にふさわしい流れになる場面説明となることを優先するよう^{注6}に、意図的に改変されているとの指摘がある。

従来『百首歌合』は藤原定家が、『源氏物語』が『狭衣物語』よりも優位にある物語であると考えていたことを証明する作品であるとされていたが、近年の研究によって『百首歌合』は、『源氏物語』や『狭衣物語』の作中歌を、そのままの作中の和歌としてではなく、『百首歌合』独自の解釈を加えた歌として捉えている^{注7}ことが指摘されている。『百首歌合』撰者、藤原定家の意図は、歌合を行い『源氏物語』優位であることを証明するよりほかに、撰集『百首歌合』としての、撰者の個性の発現があったのではないだろうか。『百首歌合』は物語作中歌を歌合にした作品であるが、作中歌である、歌合であるという枠を越えて、撰集としての作品性が見出せるのではないだろうかと考えられる。

そこで本論では、『百首歌合』をひとつの撰集として捉えた上で作品構成を考察し、撰者の個性の発現についても考察を試みたい。

三 歌群の存在

『百首歌合』は一首一首が物語作中歌としての作品世界を持ち、二一首一対が各々、歌合としての妙を持っているが、『百首歌合』全体を一つの撰集として俯瞰して見た場合、和歌一首の意味や、歌合の対を越えて、数首の群で、あるイメージを構成する部分がある。この、同一のイメージを持つ和歌を配列した群を歌群とする。ここでは、特に巻頭と巻軸に見られる歌群に注目したい。定家が巻頭と巻軸に重きを置いたと考えられる撰集は『百首歌合』だけではないからである。『新勅撰和歌集』は、巻頭と巻軸に数百ずつまとまりのある歌を配している部分に『古今和歌集』への意識が見てとれることが、森晴彦氏によって既に説き明かされている^{注8}。

巻頭は「月」を含む和歌が、巻軸は神に関わる語を含む和歌が多く配されている。巻頭の「月」は、月の中でも照り輝く月ではなく、沈む月ばかりが詠まれている。沈む月の詠が並ぶ中に「草の原」という墓場を意味する歌語を含む和歌が二首並んで配されていることに引きずられ、死を連想させる配列となっている。巻

頭八首、四番までを以下に掲載する。^{注9}

一番 恋部

左 中將ときこえし時、限りなく忍びたるところにて、あやしくなるみじか夜さへほどなかりければ 六条院
1 見ても又逢ふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎる我が身と
がな

右 讓位のこと定まりて後、忍びて齋院に参りて、出させたまへるとて 御製

2 めぐりあはむ限りだになき別れかな空行く月の果てを知らねば

二番

左 弘徽殿の三の口にて、朧月夜の尚侍に

3 深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

右 大將におはせし時、弘徽殿にて、女二宮に

4 死にかへり待つに命ぞ絶えぬべきなかなかに頼みそめけむ

三番

左 三の口にて 尚侍

5 うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじと思ふ

右 一品の宮、人しれぬさまにおはしけるを、ゆくへおほ

つかなくおぼしめし悩みけるころ、尾花がもの思

ひ草の、霜深くなりゆくを御覧じて

6 尋ねべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

四番

左 朧月夜に尚侍の取り替えたまへりし扇に書き付けたまふ

7 世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへて

右 後の宮初めて見たてまつらせたまひける暁

8 嘆きわび寝ぬ夜の空に似たるかな心尽しの有明の月

傍線で示したように、連続して配された八首の和歌の中に、「月の果て」、「入る月」、「有明の月」という沈みゆく月を詠む和歌が四首配されている。沈みゆく月の景は物事の収束を思わせる景である。さらに、沈みゆく月の歌群の中に、点線で示した「草の原」が二首並んでいる。「草の原」は人の訪れがなく荒れ果てた墓場を意味する歌語であるが、この二首が歌合の対とされていることも注目すべきかと思われる。二首の接点として、「草の原」が使用されることで、三番の二首が歌合として表現する主題が、

かつての女性の荒れ果てた墓場を訪れることのない、冷淡な男君像に集約されるのである。暗い雰囲気漂う、沈む月の景が並ぶなかに、三番の歌合によって、荒れ果てた墓場のイメージが付与される。

総じて、巻頭の八首は、命の収束、死の連想を導いているといえる。

四 歌群としての死、作中歌個々としての恋

歌群として死の連想を導いている巻頭であるが、歌群を構成する一首一首の和歌の死の印象は、強くはない。歌群としての読解を行う前に、各詠の作中歌としての読解を、二番の二首を例に読解する。

二番

左 弘徽殿の三の口にて、朧月夜の尚侍に

3 深き夜のあはれを知るも入る月のおほろけならぬ契りとぞ思ふ

右 大将におはせし時、弘徽殿にて、女二宮に

4 死にかへり待つに命ぞ絶えぬべきなかなかに頼みそめけむ

3は、宮中で宴が開かれた夜に、酔い心地の源氏が月の美しい

趣深さにつられて藤壺の周りを窺い歩いていた時に弘徽殿が開いていたので、通りがかった女性に詠みかけて気を引こうとした歌である。この女性は後に朧月夜の君と呼ばれる右大臣の娘であった。朧月夜の君が、大江千里の「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」という古歌を口ずさんでいたことを手掛かりにして、朧月という目の前の実景をもとに、おほろげではない私達の縁があると、通りすがりの女性を口説いている。朧月夜の君の独り言に返しをして、自分もあなたと同じ気持ちで同じ月を見ていると、意思を表示した和歌となっている。大江千里歌が表現する春の幻想的な景の美しさを、居合わせた二人が共有し、心が重なることを表現しつつ、男女の恋の駆け引きとなる和歌になっている。

4は、美しい女二宮を垣間見た狭衣が言い寄った和歌である。かつて天稚御子が狭衣を迎えに来た時に引きとめようとした嵯峨院が「みのしろ衣（みのしろも我脱ぎ着せん返しつと思ひなわびそ天の羽衣）」と詠みかけて、狭衣に与えると約束した娘、女二宮との縁談にずっと気が進まなかったにもかかわらずである。女二宮に魅かれ始めて、今になって嵯峨院が与えると約束したことを頼みにし、何度も恋死にしているうちに命がなくなってしまうと恨み事をいう。垣間見る以前は、女二宮との結婚にその気が

全くなかった狭衣の実情からすると、大げさな言いぶりであり、かえって今までの女二宮への心の浅さが思われる。

二番で詠まれる「月」は、3の「入る月」である。先に「月」歌群は命の収束を思わせると述べたが、3を一首の物語作中歌として捉えたと、『源氏物語』の場面として「入る月」に死の意味は込められていない。『源氏物語』中で描かれている3の「入る月」は、朧月夜の君と共有する、朧げな夜月の景色であり、源氏は、月に託した朧月夜の君への恋心を訴えている。

4についても、「死にかへり」「命ぞ絶えぬ」と死を思わせる歌語が使用されているが、『狭衣物語』中で詠まれた4の和歌は、狭衣が、死にかへり、命が絶えそうになって詠むような場面における和歌ではない。『狭衣物語』の場面として、偶然垣間見した女二宮に成り行きで詠みかけた恋歌であり、本来、作中歌として狭衣の死への思いが迫ってくる和歌ではない。

しかし、「入る月」と「死にかへり」「命ぞ絶えぬ」が、接点を持つ歌合の番いとして配されることで、対象の和歌に死の意味が含まれていることに焦点が絞られる。

左右の両歌に死を連想させる詞が明確に含まれているため、二番を例として述べたが、月歌群の、他の詠についても、物語場面の中では恋歌として詠まれたものである。1は、源氏の義母であ

り、理想の女性でもある藤壺の宮との密会の際の別れを惜しむ源氏の詠で、夢のような逢瀬の時を名残惜しんでいる。2は、自身の即位によって、従兄妹で理想の女性である源氏の宮と会することができなくなることを悲しむ狭衣が、最後の逢瀬の別れの場面で源氏の宮に、永劫の別れへの悲嘆を訴えている。5は、源氏が通りがかりの朧月夜の君に恋心を訴えた、3に対する朧月夜の君の応酬である。名を教えてほしいと言ひ募る源氏に対して、例えば私が死んでもあなたはもう私のことなど忘れてしまう、そんな程度の恋心なのではないかと切り返している。6は、狭衣と恋仲になつていたが、行方不明になつている中流の女性、飛鳥井の女君が、狭衣と恋愛関係にあるという事情を知らない狭衣の乳母子に連れ去られ、入水自殺を考えている時に、自身の乳母子に連れ去られたという事情を知らない狭衣が、ふと飛鳥井の女君の行方を思つて詠んだ歌である。狭衣がかつて恋愛関係にあった女性に思ひを寄せている。7は、3、5の朧月夜の君と源氏の恋の応酬の後の源氏の独詠の場面である。最後まで名を明かさなかった朧月夜の君だが、逢瀬のしるしとして二人が持っていた扇を交換して別れた。本歌は、朧月夜の君と別れた後にしるしの扇を眺めて偲んでいる源氏の独詠である。8は、理想の女性である源氏の宮と容姿のよく似た、故式部卿の姫君を発見した狭衣が、手の届かな

い存在である源氏の宮の身代わりとして、神が授けてくれた女性だと喜んだ独詠である。

物語の場面状況に鑑みずに、配列された詞だけを考えると、沈む月をさらには死を連想させる「月」歌群であるが、歌群を構成している一首一首の作中歌の、物語作中歌として本来待たされていた意味は、いずれも恋の場面で詠まれたものであり、月に寄せた「恋歌」、生き死にに寄せた「恋歌」である。作中歌としては恋歌であることに重点が置かれ、月や死の発想には注目されていなかった。

「月」歌群は、月と生き死にの詠を連続して配すること、構成する各作中歌が、「月」に寄せた恋歌、「生き死に」に寄せた恋歌であることに光を当て、本来恋歌であった作中歌に、死という新たな読解を与えている。

五 巻軸、神に関わる語歌群の存在

巻頭の四つの番（1～8の歌）は、「月」という語がまとめて配されることで、『源氏物語』『狭衣物語』の物語作中歌として持っていた歌意である対象の和歌に込められた恋心や嘆きといった詠者の思いの他に、歌群として死の連想を導いていた。巻頭と同様、巻軸もまた、複数の和歌で形成される歌群が見出せる。神

話や神の威光に繋がる詞が多く使用されているのである。神に関わる語を含む和歌を以下に挙げる。

恋

二十九番

左 兵部卿宮の上、二条院に渡りたまひぬと聞きて

右 大将

57しなてるや鳩の湖に漕ぐ舟のまほならねどもあひ見しものを

右 賀茂行幸の日

58思ふことなるともなしにいくかへり恨み渡りぬ賀茂の川波

三十番

左 兵部卿宮の上に対面したまへるに、朝顔の花をさしい

れて 右 大将

59よそへてぞ見るべかりける白露の契りか置きし朝顔の花

右 斎院に

60神山の椎柴隠れ忍ばぞ木綿をも掛くる賀茂の瑞垣

四十一番

左 「ふり捨てて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖は

ぬれじや」と侍りける御返り 前坊の御息所

81 鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢までたれか思ひおこせむ

右 大将におはしましし時、高野に参らせたまひて

82 恋しさもつらさも同じほだしにて泣く泣くもなほかへる山かな

四十三番

左 泣く泣く恨みてもかひなき御心のうちなれば

85 逢ふことのかたきを今日に限らずはいま幾夜をか嘆きつつ経む

右 斎院卜定の日、御車寄せて

86 今日やさやかけ離れぬる木綿襷などその神に別れざりけむ

別部

四十五番

左 須磨の別れに

89 憂き世をば今ぞ別れてとどまらむ名をばただすの神に任せて

右 世をおぼし捨てける夜、斎院より出でさせたまふとて

90 涙のみよどまぬ川と流れつつ別れる道は行きもやられず

雑部

八十七番

左 六条院、須磨に移らひたまひけるころ、右近将監解け

て、御簡削られにければ、御供に出で立つに、院の御
山にまうでさせたまひける夜、糺の御前見やるほど
に、下りて御馬の口を取りて 源朝臣

173 ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣

右 一条院にて、雨降りける日

174 柏木の葉守の神になどて我雨漏らさじと契らざりけむ

八十八番

左 須磨の浦に祓したまふとて

175 八百万の神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

右 斎院の御禊の日

176 みそぎする八百万代の神も聞けもとよりたれか思ひ初めてし

九十五番

左 須磨の浦にて、花の宴の日おほし出でて

189 いつとなく大宮人の恋しきに桜かざしし今日も来にけり

右 後の宮わたりたまひて後

190 尋ね見るしるしの杉もまがひつつなほ神山に身やまどひなむ

九十八番

左 六条院に行幸の日、御前の菊を折らせたまひて、昔、
青海波の折おほし出でて、おほきおほひまうちぎみに

195 色まさる籬の菊もをりをりに袖うちかけし秋を恋ふらし

右 賀茂の祭の近衛使を御覧じて

196 ひき連れて今日はかざしし葵草思ひもかけぬしめのほかかな

九十九番

左 大原野の行幸の日、おほきおほひまうちぎみに遣はし
ける 冷泉院御製

197 雪深き小塩の山に立つ雉の古き跡をも今日は尋ねよ

右 嵯峨院の御時、御前にて笛つかうまつらせたまふに、
空の気色変はりて稲妻しきりにすれば

198 稲妻の光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかけはし

百番

左 六条院、明石より都に帰りたまひて、初めて内に参り

ためへりけるに 朱雀院御製

199 宮柱巡り合ひける時しあれば別れし春の恨み残すな

右 天稚御子の迎へ、空しく帰させたまひて 嵯峨院御製

200 みのしろも我脱ぎ着せむ返しつと思ひなわびそ天の羽衣

傍線部で示した「賀茂の川浪」等を、神に関わる語とする。巻頭の「月」歌群の「月」と比較すると、神に関わる語は広範囲に点在しているが、概観して巻軸に集中しているといえよう。57から200までという、広範囲かつ分断のある和歌群を一つの歌群とすることは難しい。しかし少なくとも『百首歌合』は、巻頭には採られていなかった神に関わる語が、巻軸に向かうにつれ頻度を増して採られていき、巻軸四首（196～200）でまとめて配されている点は注目し得る。神に関わる語を意識して巻軸に集めていると捉えてよいだろう。

六 段階的、神の使用による神への接近

一言で、神に関わる語、とまとめているが、神に関わる語群はさらに、意味内容と、配列のまとまりから三つの群に分割されると思われる。以下、57、58、59、60をⅠ群、81、82、85、86、89、90をⅡ群、173、174、175、176、189、190、195、196、197、198、199、

200をⅢ群とする。

三つの群はそれぞれ配列されている部立が異なる。(源氏狭衣百番歌合)は5つの部立で分類されている。恋、別、旅、哀傷、雑の5部である。)多少のズレもあるが大別して、Ⅰ群は恋部、Ⅱ群は別部、Ⅲ群は雑部に配列されている。群によって、歌合として左右歌が共有するテーマが異なる。以下、二十九番、四十五番、八十七番、を例に三つの群の比較を行う。

二十九番は、宇治の大君の心を獲得すべく、大君が気に掛けている妹中の君を匂宮に嫁がせた薫であったが、中の君が匂宮から大切に扱われている事を聞くと、今更ながら中の君が惜しく思われるという57の歌と、狭衣が賀茂の行幸に向かい源氏の宮との宿世を反芻する(源氏の宮は斎院に、狭衣は帝位についた)という58の歌を合わせている。

57の歌と58の歌は、男君が思いを遂げられなかった女君との関係を振り返るという、詠い手の心境という点で共通する。ここで、神に関わる語として傍線を引いた「賀茂の川浪」は、源氏の宮が斎院として暮らす場所としての賀茂社が詠み込まれており、賀茂の地に來ると源氏の宮が思われるという、女性を思い出す契機になっている。

四十五番は、右大臣との政治的争いに敗れ須磨に退去する源氏

が、亡き父桐壺院の山稜を拝み、神に暇乞いをする89の歌と、女二宮との関係がこじれてしまった狭衣が出家を思い、女二宮との子である若宮への執着を振り切って決別する90の歌を合わせている。

89の歌と90の歌は、男君が暮らす政治的な貴族社会との決別を、亡き父や我が子といった大切な人との別れに象徴している点で共通する。ここで、神に関わる語として傍線を引いた「ただすの神」は、「名を糺す」という名前を持つ賀茂の糺神に対し、須磨に退去させられることとなった自身の罪に対して、身の潔白を訴えている。

八十七番は、源氏の栄華も無実も知りながら源氏を見捨てる賀茂の神を恨む173の歌(須磨に旅立つ源氏一行が桐壺院の山稜を拜んだ後に御供の右近将監が源氏の過去の栄華を思い詠んだ)と、狭衣が女二宮を諦めざる得なかったことを悔いている174の歌(若宮と戯れながら、神威が宿るゆえに雨が漏れないとされる柏木の神に訴える形で詠んだ)を合わせている。

173の歌と174の歌は、賀茂の神や、葉守の神に訴えかける形を取って心情を表現している点で共通する。ここで、神に関わる語として傍線を引いた「葵かざし」「賀茂の瑞垣」「葉守の神」は和歌で訴えかける直接的な対象としての神であり、八十七番の歌合の共通の主題として光が当てられている。

恋部を主とするⅠ群は、神に関わる語を使用しているが、こ
でいう「賀茂の瑞垣」とは、想い人が住む賀茂の地を思う詞であ
り、賀茂の神に向けて歌を詠みかけているわけではない。別部を
主とするⅡ群は、世の中と別れて行くに至る、誰にも訴えられな
い思いを和歌に託している。「名をばただすの神にまかせて」に
神への訴えが垣間見えるが、歌合としての二首の共通点は世の中
との別れである。Ⅱ群も神を主題とする歌群とは言えない。雑部
を主とするⅢ群は、左右歌共に、神に訴えかけるといふ形を採っ
ている。作中歌としては、173の歌は、無実の罪で須磨に退去する
ことになった悔しさが滲み、174の歌は、女二宮との関係を悔いる
意味を持つているが、歌合として173の歌と174の歌を並べて配列す
ると、誰にも理解されない、誰にも言えない思いを、神に対して
訴えている詠者の構図が焦点化される。

「神」に関わる語が多く配される巻軸周辺だが、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの
三つの群は「神」の持つ意味が異なる。恋部に配されたⅠ群は、
恋する人への恋情が中心の合せであり、「神」に関わる語は神へ
の訴えかけの意味に焦点が当てられていない。別部に配されたⅡ
群は、別れの中で、理解されないつらさを神に訴えかける形を
とっており、Ⅰ群と比較すると神の存在感が強まる。雑部のⅢ群
は「雑」部とされているように、合わせの主題がⅠ、Ⅱ群と比較

して曖昧である。しかし、先のⅠ、Ⅱ群と比較して「神」に関わ
る語が多用されている。主題が曖昧に暈された中、「神」に関わ
る語が度々登場することで神の存在が強調される。Ⅲ群の合わせ
も神への訴えかけが主題であるとは言い切れないが、突如Ⅲ群で
「神」を多用することで、Ⅰ群、Ⅱ群と段階を経て徐々に存在感
を増している神に焦点があてられる。以上のような歌集が全体で
表現する流れは、各和歌、各歌合だけを取り出して見たのではわ
からない。物語の良さを讃える（『源氏物語』や『狭衣物語』の
物語歌秀歌撰としての立場）、歌合の妙を楽しむ（物語歌合集と
しての立場）だけではない、『百番歌合』という撰集独自の読み
が可能なのではないだろうか。

ここで、三つの群の、他の歌合が各群としての特徴を備えてい
るか考察したい。Ⅰ群について述べると、三十番の歌合が、後ろ
盾もなく勾宮に引き取られたことを悔いる中の君に対して、大君
の面影を中の君に求め始めて、勾宮に譲ったことを後悔する薫が
詠みかけた59の歌と、源氏の宮が斎院となることが決定した時
に、狭衣の厄介な恋情から逃れられると喜ぶ源氏の宮に対して、
自分が恋心を隠してきたからこそ斎院となれたのだという、冷淡
な態度に対する恨みを詠みかける60の歌を合わせている。左右歌
は、男君が女君に手を出さなかったことを悔いている点で共通で

あり、機を逃した恋が主題として浮かび上がる。

Ⅱ群について、四十一番と四十三番の歌合は、『百番歌合』の部立としては恋部に分類されているが、「神に別れざりけむ」という語が含まれている点、恋情を抱く人との別れの歌である点で、別部に通ずる別れの意味が含まれていると思われる。四十一番の歌合は、源氏との関係が崩壊してしまつた六条の御息所が、伊勢に向かう際に、自分を捨てて行くのかと詠う源氏の歌への返歌として、後日送つた81の歌と、出家しようと都を発つたのに、若宮や両親を思い出し、出家を叶えることができなかった狭衣が、山を降りる際に詠んだ82の歌を合わせている。左右歌の共通点は別れによって、かつての女性や大切な血縁者に対して、恋しさが増す点である。四十三番の歌合は、源氏が皇子の後見となるようにと、藤壺から避けられる源氏が、情念冷めやらず忍びこんだ逢瀬でも拒み通され、逢えない苦しみを訴える85の歌と、斎院として賀茂に向かう源氏の宮に対して、立場が異なる、この別れが苦しいと訴える86の歌を合わせている。左右歌は、手の届かない立場にある、つれない理想の女性へ恋心を訴えている点で共通しているが、同時に、物語中で恋の対象となる可能性が残されていた女主人公が、完全に男主人公を拒絶する契機となる、別れのある場でもある。（藤壺は皇子の母として、源氏の宮は斎院として

の立場を取ることで男君との距離を取る。）

Ⅲ群について、八十八番は、須磨で御祓いをした源氏が、川に流されていく人形に自身の身を重ね合わせて悲しく思い、改めて神々に身の潔白を訴えている175の歌と、斎院として賀茂に向かう源氏の宮の行列が人々に祝福される姿を見た狭衣が、誰よりも早く源氏の宮を見初めたのは自分だったのだと、神々に訴える形で、源氏の宮に詠みかけた176の歌を合わせている。左右歌は「八百万の神」という詞が共通であり、誰にも理解されない、もしくは理解されてはならない思いを、不特定多数の神に訴える点で共通である。九十五番の歌合は、須磨の生活が一年経過し、庭に植えた桜が咲き始めた様を見た源氏が、かつて宮中の桜の宴で、帝から賜つた桜をかざして華やかに舞っていた頃を思い出し、とりわけ昔が恋しく思われて詠んだ189の歌と、源氏の宮の身代わりとして故式部卿の宮の姫君を迎えた狭衣が、故式部卿の宮の姫君の素晴らしさを思いつつも、源氏の宮への思いも捨てられないと思ひ乱れている190の歌を合わせている。189、190の歌は作中歌として物語場面に共通点があるとは思えないが、「大宮人」という、宮中に仕える人を指す古語と、「しるしの杉」という三輪山伝説を背景に引く詞によって、古代的な世界観を共有している。九十八番の歌合は、栄華の絶頂にある晩年の源氏が、冷泉帝

の行幸の折に庭の菊を折りとり、かつて頭中将と菊をかざして青海波を舞った栄華を思つて頭中将に詠みかけた195の歌と、帝という立場ゆゑ葵祭に出かけられない狭衣が、人々への贈り物を使い託しながら、自分は参加できない不自由を詠んだ196の歌を合せている。左右歌は男君が自分の人生を振り返り、昔と今を重ね合わせている点で共通であり、「籬」と「しめ」という、場の境界をいう詞を使用している点でも共通である。九十九番は、冷泉帝が大原野行幸の折に、源氏が酒やくだものを贈つただけで、供奉しなかったことを責める197の歌と、笛の音に応じて天稚御子が降臨し狭衣を天上に連れて行くとした折に、狭衣が天界へ行こうとした198の歌を合せている。左右歌は、「古き跡」「天の原」という古い時代や、神代の時代といった、古の世を思わせる詞が使用されている点で共通である。百番は、須磨から帰京した源氏が朱雀帝に対面した際に、再会したのであるから源氏を須磨に退去させたことは許してほしいと詠んだ朱雀帝の199の歌と、狭衣が天稚御子に連れられて天上に行こうとした時に、娘を与えるから天の羽衣は脱いで地上に留まってほしいと嵯峨帝が詠んだ200の歌を合せている。左右歌は帝の地位にある人物が、男主人公に嘆願している点で共通であり、「宮柱」「天の羽衣」という古代的、神話的な詞を使用している点でも共通である。

ここで、神に関わる語の使用についてまとめたい。Ⅰ群は恋を主題とし「神」に関わる語は斎院という立場に就いた源氏の宮を表現するために使用されている。Ⅱ群は『百番歌合』の部立として恋部に分類されているものもあり、Ⅰ群の恋の主題との繋がりも見られるが、恋の中でも、恋の終わりである別れを主題としており、次の別部との関連が見られる。神に関わる語の使用については、部分的に神に訴えかける形で別れの思いを込めており、別れを主題としながら、詠者が神に訴えかける構図も提示し始めている。Ⅲ群は部立としては雑部にあたる。各群の神に関わる語は、『狭衣物語』の物語場面上の設定に関わっていただけで、歌合としては恋を主題としていたⅠ群、恋の場面を引き継ぎつつ別れに主題を変化させ、「神」への呼びかけもほめめかすⅡ群を経て、Ⅲ群では、左右歌が神に関わる語を共通して使用することで、物語作中歌であることを離れて、左右歌が神の神威や神話の世界観を持つ歌合になっている。しかし、唐突に『源氏物語』と『狭衣物語』の作中歌であることから離れて、神を押し出すのではなく、恋を主題としており物語の共通点が多いⅠ群、Ⅰ群を引き継ぎつつ物語にある神との関わりを明らかにするⅡ群を経ることで、違和感なく、Ⅲ群の物語とはかわりが薄いように思われる、神話の世界を主題とする歌合へと連想される。

七 神話的世界の表出

Ⅲ群の中でも特に末尾三首は神話性が高く思われる。三首の中で、傍線で示した「天の原」「宮柱」「天の羽衣」は神話、伝説的な、悠久の世を思わせる詞である。「天の原」は『古事記』において高天原と呼ばれている天津神の住まう天上の国、「宮柱」は『古事記』においてイザナギとイザナミが廻り会って子孫を残した天地創世の場、「天の羽衣」は衣を隠された天女が天に戻れなくなる天の羽衣伝説の鍵となる品である。いずれも、『古事記』に見られる神代の世界や、羽衣伝説という古い物語の世界を象徴する詞である。各歌が物語作中歌として持たされていた本来的な意味とは別に、古い時代の世界観を、詞によって連想させている。『源氏物語』や『狭衣物語』の世界や、『百番歌合』の撰者が生きている時代を越えた、伝説的な古の時代の世界を含んでいる詠である。

巻軸三首の傍線部の語は、共に神話や伝説の世界を思い起こさせる語であり、古代的な世界を和歌に取り込んでいる点で共通だといえる。巻軸三首以前にも「しるしの杉」や「大宮人」等古代的な世界を思わせる語が点在しているが、『百番歌合』の末尾に向かうほど、古代的な詞の頻度と、詞の持つ神話性が増してい

く。

ここで、傍線で示した「神」に関わる語を抽出する。

「賀茂の川浪」「賀茂の瑞垣」「伊勢」「木綿櫛」「神」「ただすの神」「葵かざし」「賀茂の瑞垣」「葉守の神」「八百万の神」「八百万代の神」「しるしの杉」「神山」「葵草」「しめ」「小塩の山」「天の原」「宮柱」「天の羽衣」。

前半は「賀茂の川浪」といった『源氏物語』や『狭衣物語』場面の舞台や、「ただすの神」といった名前にちなんだ表現、「葵かざし」といった『源氏物語』や『狭衣物語』の過去の場面を描くといった、神に関わる語が多いが、後半になると「しるしの杉」や「宮柱」等の『源氏物語』や『狭衣物語』の物語世界から逸脱した、古の物語を引く詞が増えている。

巻軸は、巻頭に「月」がまとめて配されていたように同じ語が並んで配されているというわけではないが、複数の和歌が古代的な世界という同一の発想を共有する語を持つことで、歌群として新たな世界観を表出していると考えられる。そしてⅠ群、Ⅱ群、Ⅲ群、さらにⅢ群の中でより元の『源氏物語』と『狭衣物語』から発展した、作中歌の中の神話性に次第に焦点を当てていくことで、『源氏物語』と『狭衣物語』の作中歌としての世界観を大切にしつつも、連想によって、『百番歌合』独自の世界観を内包さ

せている。

歌合である『百首歌合』の各番には、それぞれ左右歌が共有する主題が存在する。その主題は、『源氏物語』と『狭衣物語』の物語場面の一致に見られることもあるが、詞の一致で主題が提示される場合、『源氏物語』や『狭衣物語』の物語場面で語られる意味とは異なる意味に焦点があてられる場合がある。『源氏物語』や『狭衣物語』の世界を基本としながら、連想によって次第に『百首歌合』によって構成される新たな解釈が与えられていく構造となっている。

八 撰者の心

『百首歌合』の巻頭と巻軸には、沈みゆく「月」の歌群から連想させる死と、『源氏物語』『狭衣物語』の物語世界から段階的に導き出される、神への訴えと神話世界との一体化が見られる。『源氏物語』『狭衣物語』の作中歌として持っている意味とは異なる意味が、この、歌群によって導き出されている。歌合として『源氏物語』と『狭衣物語』の作中歌を合わせること、各作中歌を単体で読んだ時とは異なる視点で各歌を読むことができる。『百首歌合』は、作中歌、歌合、歌群、撰集という入れ子構造で、物語歌の魅力、歌合の妙、歌集の魅力、撰者の美意識といった複

数の視点が入り組み、それぞれが光彩を放つ作品である。

『源氏物語』と『狭衣物語』の和歌を借り、『百首歌合』として撰者が表現したかったものとは何であつたのだろうか。私見を述べたい。

巻頭に提示された死の発想、巻軸に向かう神への訴え、巻軸の神話世界との一体化、は撰者の身近に死があつたことが思われる。神話世界との一体化は、現実世界と神の世界との心的距離の遠さゆえに願われるのではないだろうか。撰者が意識して構成したのかはともかく、撰者自身のどうにもならない現実と手の届かない理想世界への希求が、『百首歌合』に込められているように思われる。直接死や神への思いを詠み込んだ歌を詠むのではなく、本来は恋歌であつた『源氏物語』『狭衣物語』の作中歌を使用することで、死と神への撰者の思いを暈しつつ、『源氏物語』『狭衣物語』の世界の背後に、『百首歌合』撰者の意図も付与されているのではないだろうか。

『百首歌合』の撰者とは、藤原定家であると考えられている。病との戦い、近しい人の死等、定家の身近には常に死があつた。現実世界に蔓延る死への慟哭が、『百首歌合』には隠されているのではないだろうかと結論付けては穿ち過ぎであらうか。

注

注1 穂久邇文庫蔵本を指す。翻刻は、竹本元暉・久曾神昇編集『未刊国

文資料 定家自筆本 物語二百番歌合と研究』(昭和三十年十二月)に掲載される。

注2 注1と同資料に掲載される。

注3 田中新一、「定家の形象行為―源氏物語について」(『国語と国文学』

昭和三十年六月)の中で定家と『源氏物語』の関係が論じられる中で、『百番歌合』の『源氏物語』優位が前提とされている。

注4 『百番歌合』に採られた『源氏物語』と『狭衣物語』の詠は、比較的

に各物語の中でも、源氏と藤壺の密通や、狭衣が天稚御子を降臨させる場面など、物語の進行に関わる印象的な場面での詠が多い。

注5 田中新一氏によると、『百番歌合』は、『源氏物語』歌である左歌ど

うしの繋がりが密接で、先に『源氏物語』歌だけを百首撰した後に『狭衣物語』歌である右歌を配したのではないかとしているが、樋

口芳麻呂、「源氏狭衣百番歌合の配列について」(『季刊文学・語学五十七巻』、昭和四十五年九月)によって、右歌から左歌への連想も少なからずあることが指摘されている。

注6 米田明美氏は、『後百番歌合』の詞書の記述と歌の配列―ほの見え

る『伊勢物語』の世界―において、本来『伊勢物語』「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもの身にして」以外にも『古今和歌集』の「五月待つ花橘の香をけば昔の人の袖の香ぞする」も

引いている『源氏物語』の詠が、『後百番歌合』の詞書では、『伊勢物語』の「月やあらぬ春や昔の…」の場面方が強調されるように

「古今和歌集」を連想させる言葉を詞書から省略していると、物語場面として、「五月待つ…」場を排除することで、「月やあらぬ春や昔の…」という場を左右歌が共有していることに、より焦点があて

られる作爲が認められるとする。

注7

東野泰子「源氏狭衣歌合」の番とその形成(『百舌鳥国文九巻』、一九八九年十月で、『源氏狭衣百番歌合』の詞書が正確な物語場面の説明よりも『源氏狭衣百番歌合』中の流れを重要視した改変が行われていることが指摘されている。

注8

森晴彦『新勅撰和歌集巻頭巻軸歌の研究』(おうふう)、二〇〇八年九月

注9

『百番歌合』本文は小町谷照彦、後藤祥子訳注、『新編日本古典文学全集 狭衣物語①』の巻末付録から引用した。

(ながめま ともな 二〇一四年修士課程修了)

